

片山一道、『ポリネシア海道記―不思議をめぐる人類学の旅』臨川書店、2019年、278 p.

古澤拓郎*

地域研究は、決して人文・社会科学の分野のみに限られたものではなく、自然科学によるものもある。さて、地域研究者は目的をもってフィールドを訪れるが、そのたびに目的以外のさまざまな興味深い事象に出会ったり、驚くような経験をしたり、不思議な話を耳にしたりする。しかし、このようなことを研究成果と呼べるレベルにまで高めるのは容易ではない。特に自然科学者であれば、それを検証するために、綿密な研究計画を立て、正確に調査を行ない、細かく分析をして、客観的に明らかな結果を示さなければならない。自然科学の論文は、必要かつ十分なことのみが書かれるのであって、余談を入れることはできない。したがって、多くの自然科学者は、記憶に残るさまざまな経験を表現することもできずに、過ごしている。

しかし、本書は自然科学であるが故の制約から解き放たれたかのように、のびのびと書かれている。オセアニア地域研究において、自然人類学、考古学、人類生態学などの、自然科学に立脚した分野の実績は、実に豊富である。その中でも、片山一道氏は形質人類学や骨考古学の分野をリードしてきた。フィールドワークと科学的な分析に基づいた研究成果は、国際的科学誌に論文として数多く掲載

されており、世界的な第一人者である。その一方、『骨が語る日本人の歴史』（ちくま新書）や『海のモンゴロイド―ポリネシア人の祖先を求めて』（吉川弘文館）など、日本語でも多くの著書がある。

片山氏の本は、いままでも親しみやすい文体のものが多いが、本書はさらに自由な文体で書かれている。科学的な研究が、客観的な事実のみしか発見として公表することができないのとは対照的に、本書は科学的な根拠を脇に置き、著者の主観によるポリネシア論が大半を占める。

しかし、著者の主観というのは、単なる思い付きや夢想というのではない。ここにあるのは、数々の発見をしてきた科学者の心象風景である。そのため、ふとした思い付きや、根拠の弱い推論であっても、なるほど科学者からみるとそういう理解ができるのか、と考えさせられるところがある。

章のタイトルと構成は以下のとおりである。

第1章 南太平洋の島嶼世界をゆくーポリネシアの不思議な島々と人々

第2章 世界のヘソか、あるいは海のコブかーイースター島（ラパヌイ）の不思議

第3章 トンガ王国紀行ークック船長が「友情諸島」と呼んだ島々

第4章 ポリネシアの人物群像ー「巨人たち」、ときに「虚人たち」との一期一会

第5章 チャタム諸島ーポリネシアの行きどまり、地球の終着駅

あとがきーポリネシアの〈不思議〉を再

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

訪、再考する旅

第1章が「吾が身修めの旅、心の旅、そして記憶の旅」、「メモリー・エッセイのように」という節で始まることからして、あくまで片山氏の経験と記憶を著わすための本であることが察せられる。

第2章から5章は、それぞれ独立した話になっている。また、そこには片山氏の専門である、人々の身体形質、先史時代のことに加え、芸能、宗教、ラグビーなど多種多様な話題が登場する。興味を引かれる話題は、人それぞれであろうが、いくつかを紹介したい。

イースター島（ラパヌイ）は、大きなモアイ像で知られるが、なぜ、どのようにして、このような巨大石像が作られたのかは明らかになっておらず、多くの人々の関心を引いてきた。片山氏は、いくつかの学説に触れつつも、人間がもつ「目的意識も理由もないまま（中略）ステレオタイプな行動に執着し続ける」性質が、像を巨大化させたのではないかといった推論を加え、「西欧流の近代合理主義者の思考回路で考えるほどに（中略）神秘的ではない」、「あるべきところ（ラパヌイ）に必然のようにあっただけ」（p. 66）とまとめる。

この説は、決して学術的に立てられたものではなく、強引な推論である。しかし、記録が残されていない不思議なものに対して、いつも合理的説明を加えようとするのが、必ずしも正解ではなく、あるがままに理解することの必要性を教えてくれるのである。

また片山氏が端々にみせる、環境と人間との関わりへの、鋭いまなざしにも、はっとさせられるところがある。ラパヌイの続きでは、島には「ピッタリの石材」があったという環境条件を、さりげなく述べる。また、モアイ像を作ることによって人々が「連帯感、達成感、高揚感、完結感」などを得られたが（p. 103）、そのとき既に島では森林が失われ、それゆえ大型カヌーも作られなくなって、他島との交流もままならない絶望感の中にあつたという背景を指摘する。

私は最終章のチャタム島にも強く興味を引かれた。というのもこの島に初めてたどり着いた人類は、農耕技術をもった人々であつたにもかかわらず、彼らは定着してから狩猟漁撈採集民になったことで知られている。農耕が狩猟採集より優れている訳ではないことを示す事例なのである。私は以前から、この島がどのような環境であるのか興味をもっていたが、片山氏の巧みな文章表現によって、荒海の中にある、農耕不適地の島の様子が、よくわかった。

そして、なぜこのように過酷な島で人が住み続けたのであろうかと思うとき、前述のラパヌイの話を思い出し、土地の荒れた島ではもはや外に出ていくカヌーすら作れなかったのか、と想像するのである。このようにオセアニア研究者であれば、本書を読んでいる間に自分自身がさまざまな空想を始めてしまうかもしれない。オセアニアは文字で記録された歴史が実に短く、多くの歴史が「言い伝え」に頼らざるを得ないことが多いことも一因であろう。

片山氏がポリネシアで出会った、さまざまな人々についても、ユニークなエピソードとともに描かれる。その際に、人の気質や振る舞いよりも、身体的特徴について子細に観察しているところは、さすが形質人類学者である。ポリネシア人は概して高身長にして、骨格は頑丈、筋肉質でがっちりとしていて、横幅も大きい、「胴長短脚」(p. 178) 体型で、何より手と足が大きいのが特徴であるという。こういった観察が、片山氏による「過成長仮説」につながったのであろう。

しかし、本書では俚約遺伝子仮説などを引用しつつも、あまり学術的な話はせず単に「巨人」(p. 176) と呼んでいる。それはポリネシアの島の暮らしと、遠洋探検に適した「身体遺産」(p. 180) とも呼ぶべきものであるという。

さまざまな話題が登場する本書であるが、繰り返し出てくるのは、巨人としてのポリネシア人のほかに、巨石文化や、「人間が生まれ、最後に戻る場所」(p. 134) とされるポリネシア神話のハワイキ伝説のこと、それから太平洋を分断する日付変更線という植民地主義への批判などである。

片山氏は、文章表現が非常に豊かなので、読者は自分が行ったことのない島々の風景が、目の前に浮かび上がってくるように感じる。たとえば、「口内に粘りつく塩混じりの風の重い味わい」(p. 169) のような表現は、私が南太平洋で味わう独特の空気をそのまま表しているかのようである。また教養の深さやウィットのセンスを感じさせられる。たとえば島ごとの体格の違いを、「ラガーマンに

たとえるならば、モリオリはプロップ型、トンガ人はフッカー型」(p. 141) と表現するのである。

冒頭にも書いたが、あくまでこの本は科学的根拠とは一線を画したエッセイのようなものである。そのため、正確な事実関係や、学術的な論考を求める読者には向かないであろう。また、同じような話題が繰り返し出て来たり、ひとつの話題が閑話休題によって突然打ち切られたりするのを、読みにくいと思われる場合もあるかもしれない。

なお全部で5つあるコラムは、いたってまじめであり、オセアニア地域研究や自然人類学の初学者にとって、教科書的な情報がまとめられている。

オセアニアを訪れたことのある人には多くの共感を引き起こし、これからオセアニアを知ろうとする人にとっては読みやすく魅力的な一冊であることは間違いない。

私の世代からすれば、片山氏と上下10年くらいの世代は、オセアニア研究における自然科学系研究の草創期にして、フィールドワークの黄金期の人々である。やはりオセアニア考古学者の印東道子氏による『島に住む人類—オセアニアの楽園創世記』(臨川書店) が少し前に出版されており、合わせて読むことで、この地域とこの分野への興味が一層深まるであろう。

アイザック・ニュートンは、先人の積み重ねのうえに、新たな発見をしたことを「巨人の肩の上に乗る」とたとえたが、本書は片山氏がポリネシア人研究の人生で積み重ねた知識と経験という、まさに『巨人』の肩の上

に乗って、ポリネシアを自由に論じた一冊であった。

引用文献

印東道子. 2017. 『島に住む人類—オセアニアの楽園創世記』臨川書店.

佐藤若菜. 『衣装と生きる女性たち—ミャオ族の物質文化と母娘関係』(地域研究叢書 40) 京都大学学術出版会, 2020 年, 310 p.

青木恵理子*

本書の主題は「中国農村部に暮らすミャオ族の民族衣装の製作から着用, そして保管や譲渡に至るまでの過程を通した, 母娘関係の動態である」(p.15). 著者は, 歴史的に, 特に 18 世紀清朝の直接統治による漢化により, 漢族的な父系制をとるようになったミャオ族の研究のために, 漢族の親族研究の歴史的展開をたどり, 等閑視されてきた女性の親族関係に注目する. また, ミャオ族固有の婚姻慣習を進化の遅れた母系制の名残と位置付けけるような, 現代中国のアカデミズムの現状を批判的視野に捉えながら, 1949 年以降の国家史の変容というマクロな状況のなかで展開されてきた, ミャオ女性の生活というミクロな営みを, 文献とフィールドワークを通じて明らかにすることを目的としている(序章).

フィールドワークの時期は 2009 年から 2011 年, 場所は貴州省黔东南ミャオ族トン

族自治州施秉県馬号郷 S 村. 焦点は, 「河辺ミャオ」の女性及び彼女たちの衣装製作である. ミャオ族は, モン, コ・ション, ムウに下位区分され, 河辺ミャオはムウに属す. 中華人民共和国は, 成立当初, 支配のみならず知識さえも及ばない膨大な辺境地域を抱え, 「ミャオ族」を少数民族公認カテゴリーのひとつとした. 辺境をタクソノミー的に治めるべく国家が実施した調査の結果, 辺境の多様な人々が「ミャオ族」に包含されることになった. 分類のために期待をかけた指標が, 女性の「民族衣装」であった. なかでも, 貴州省東南部のミャオ族の鮮やかな手作り衣装は, 国家行政や国内研究者だけでなく, 国外の服飾研究家等を惹きつけ, 「民族衣装」のより詳細な静的分類体系化へと誘った. それに対し本書は, 女性の衣装が製作され, 着られ, 交換され, 売買される現場に参与しながら, 女性と衣装の動態を明らかにしている(第 1 章, 付録読書案内).

S 村河辺ミャオの女性の民族衣装のなかでも特に重要な「上衣 *ud*」に着目し, その構成部分の名称, 刺繍などの違いによって区別される 30 種類の記述的名称と使用されている刺繍糸の色と生地の色を一覧によって示し, 多数の写真も提示している. 上衣の名称は, S 村の多くの女性によって使われているものもあれば, 各女性によって異なるものもあるという. ひたすら記述的に増殖しうる名称は, 外側からなされる「民族衣装」という均質なカテゴリーに収れんしない. S 村では, 優れた刺繍とは, 確かな技術で, 独創的革新的な模様を描き出しているものであると彼女

* 龍谷大学